

## 半分以上の春夫

イ・チャンウク

(辻本武 訳)

### 1

私の日本の友人の名前は高橋春夫で、彼は普通の日本人よりもはるかに多く旅行を楽しんでいた。たので世界中に友人がいた。春夫自身、こう言っている。「俺、春夫は、日本よりも外国に友達が多いんだ。」

実際に数えたことがないと言うが、おそらく事実だと思う。彼は一年のうち日本より海外にいる方が長く、日本にいる時は「死んだように」過ごすという。誰にも会わず、何の活動もしない。わざとそうしているのではないが、日本にいるとそのようになるというのだ。深海魚かウミガメのようにじっとして時を過ごして、ふいに気が向いたら飛行機に乗って外国に飛んで行く。「それが、俺、高橋春夫が生きていくやり方だ。」彼はそのように言った。

だったら、どうやってお金を都合して生計を立てているのか？旅行にはどんなお金を使ってい

るのか？

これは私の質問であったが、すぐに愚問であることが分かった。「俺は旅行をするのが仕事であり、旅行で生計を立てている」のである。

春夫のこの答えは事実であった。彼のホームページを開いてみると、有数の多国籍企業がバナー広告を出していた。その一つには私が今働いている外資系会社の広告もあった。マーケティング・コーディネーションチームという会社だが、幾つかの国内代理店の共同プロモーションを管理する―で仕事するようになって少し経ったが、これから海外に進出するかも分からない。そしてそれは私の望むところだった。

春夫は英語でホームページを運営し、そこで自分の旅行談を連載していた。彼の旅行談はかなり人気があるようで、全世界に広く読者を持っていた。照会数を見ると一万回は普通で、あるページでは十万回を超える場合もあった。おかげで彼は世界各国の多種多様な雑誌に自分の文章を載せるようになり、本も何冊か出したという。そしていつからか、旅行は彼の趣味ではなく職業になったというのである。

私は英語の勉強と思つて、よく彼のホームページを開いた。春夫の文章はたいい短文で、難しい単語がほとんどなかった。英語は春夫にも私にも外国語だったから―といえば変であるが、そうだからこそ便利だった。

彼の文章は、旅行情報を伝える類のものではなかった。パリに行けば露店酒場で貽貝料理を食

べて見たらいいとか、ペテルスブルグではエルミタージュ博物館よりロシア美術館の方がいいとか、ニュオリオンズでは夜のバーバン通りが超オススメとか—そんな文章ではないということだ。日本と比較すればここはこうで、あそこはああだという式の内容もなかった。彼は観光地を紹介することもなく、特別に日本人の立場で文章を書いているということもなかった。だからといって、味のあるエッセイとか知的で感性的な旅行記でもなかった。私から見れば、そんなものが何故あれほど人気を得ているのか理解できないくらいに無味無臭な文章なのだ。そうなのに私自身がいつの間にか彼のホームページを開いて読んでいるのであるから、不思議といえば不思議な文章だ。彼の文章には何か魔法がかかっているように思えるほどだ。

実は、彼は自分が旅行した痕跡を文章と写真を通して見せているだけである。「見せている」といっても、自分の私生活を公開して快感を得ているという意味ではない。言わば自分がいる場所を自然体で、そしてその姿をそのまま書いていると言った方がいい。そこがニューヨークのタイムスクエアであれチェンコーンの奥まった路地であれ、そんなことは意に介さないという調子だ。タイムスクエアではニューヨーカーのように生き、チェンコーンではチェンコーンで生まれ育ったタイ人のように生きた。そうなのである。「生きていく」と言うしかないやり方で、春夫は旅行していたのだ。ただし、それが「旅行」と言うことができれば、の話ではあるが。

それはともかく春夫は、人に知られていないが新鮮な発見ができるというような土地には関心がなかった。そんな土地を旅行しても戸惑うだけだという風に周りを感じさせるのであった。人

に知られていない土地を紹介しない旅行記なんて―これは路線バスの運転手が毎日通る道の風景を珍しいと感じるのと同じぐらいに、とんでもない話ではなからうか。

私はそう思うのだが、春夫はホームページの読者の中には実際に自分と「フレンド（友人）」になった人もいると言った。ある友人は元々オンラインの文章上だけでの知り合いだったのであるが、たまたま旅行先に住所があつて親しくなつたし、またある友人は旅行中に出会つた後に彼のホームページを開いて互いに連絡をし合うようになった。そんな風にして友人の輪が広がつていったという。

私たち―私とガールフレンド―の場合は、後者であつた。旅行中に出会つてから彼のホームページを訪問し、その愛読者になつたのである。

## 2

春夫との出会いは何年前かにデリーからバラナシへ行く夜行列車の中だつた。私とガールフレンドが初めて―実は最初で最後―旅行をともした時だつた。それも海外旅行である。

彼女は外国に慣れていたが、私はそうでなかつた。その時の私はトイック参考書をいつも手に持つて勉強する就職浪人生であつた。高校の時までは、将来パイロットとなつて世界を羽ばたくことを夢見ていたが、当時の私は海外旅行といえば中国に行つたことが全てであつた。しかもそ

の中国旅行というのが、父が世話役をしていた町の老人会の旅行に無理やり参加させられたことだった。「男子たる者、すべからく広い世界を知らなければならぬ」——父はそんな理由で私を老人会の中国旅行に参加させた。しかし実は父親自身が飛行機に乗るのが初めてだった。私は中国古代文明発祥地である「中原」の広い世界に出かけて、健康食品を売り込もうとする店でガイドの退屈な説明を聞きながら、買いたくない品物をつまみ上げては元に戻す、別のコーナーでも品物をつまみ上げては元に戻すを繰り返しただけである。

彼女は違った。全世界に路線を広げている外国系N航空の客室乗務員になったのだから。パイロットが夢だった私は今は机に座って血走った目でコンピュータ画面を睨みつける事務員になり、安定した公務員が夢だった彼女は今は高度九千mの空で働くスチュワーデスになった。彼女はちやうど入社したばかりだったが、インチョンをベースにアメリカなどを往復するようになる彼女の未来は明るかった。アメリカの一流ホテルに滞在費をもらいながら宿泊する人生を送るといふ話だ。

「だからこれは巨大な鉄の塊なのに、どこにでも飛んで行くことが出来るということなの。軽い綿毛が行けないような所を、黒い鉄の塊は往復できるのよ。」彼女は初飛行を終えた後、自分のような感想を語った。その時の彼女の顔は興奮気味だった。「それは大変ロマン的ですわね。」——私はこのような嫌味を込めて言うところだったが、彼女は私のこの気持ちに気付かないで言葉を続けた。

「一晩中ずつと飛行機に乗って遠い国に飛んで行き、そのホテルで時間をつぶした後また戻って来る生活なんよ。海に向こうの摩天楼に到着すると、二十時間しか飛んでいないのに二日経っているのよ。時差があるから。戻って来る時は反対ね。二十時間も飛んでいるのに二時間しか経ってないの。時間をポケットに入れておいて、また取り出すみたいと言えいいのかしら。」

彼女は入れたてのコーヒーを飲みながら、非常に面白がって言った。その日、私たちは初めて酒を飲まないで別れた。

彼女は、私の夢が飛行機だったということを知ってくれた。私は子供の時にアカデミーのフアントムシリーズやハセガワ模型を収集し、大きくなれば航空学校に進学することを当然と考えるほどであった。家族ももちろん反対しなかった。問題は視力だった。高校の時に視力が悪くなつたために、メガネをかけねばならなかったのだ。重大な欠格事由だった。しかし私は夢を捨てず、両親を説得してラ式手術を受けたのだ。

そしてそのことが原因で、全ての夢が水の泡のごとく消え去った。後で知った事実であるが、目の手術は致命的だったのだ。身体検査の時、医者がこのように言った。「飛行機というのは、前後左右だけでなく上下にも動く機械だ。飛行士は急激な重力の変化にも耐えなければならぬ。しかしラ式手術は目の網膜を削る手術だ。だから結論は？気圧が急に高くなると、視野が曇る可能性があり、最悪の場合には眼球自体が破裂してしまうこともある。」

私は空で眼球が破裂する自分を想像した。何度も想像した。雲の中を飛んで行くと、巨大な台

風に遭遇する。機体が上下左右に急激に揺れる。しかし、ふいに台風の目に入る。台風の目は全く静かである。その静けさのど真ん中でいきなり眼球がバーンと破裂してしまふのだ。視野が消失する。視野が真っ黒になるのではなく、視野というものが無くなるという意味だ。想像力が夢を殺すこともあるということ、私はその時初めて知った。布団を頭からかぶってその恐ろしい想像を繰り返した末、私は潔く夢を捨てた。

しかし、近頃も出張に行くたびに空港に立つと、妙な感覚にとらわれる。空港ではみんなが自分の体くらしいの大きさのカバンを二つぐらい引きずりながら遠い所へ旅立ち、そして遠い所から帰って来る。そんな空港でスーツを着たまま搭乗券を受け取って手荷物を預け、出国審査受けるために列に並んで虚空を見上げていると……どうしようもない考えが私をとらえるのだ。旅の目的地というものは、どのようにして作られるのか。人が目的地を必要としているのではなく、目的地が人を必要にしているのではないか。人間が旅立ち帰って来るのではなく、旅立つ場所と帰って来る場所とが人間をやり取りしているのではないか？まだら模様の表紙に飾られた西洋の格言集に出てくる言葉を、その通りに考えたのである。だから私は彼女に旅行を提案したのだった。

列車はかなり汚らしかった。寝台車だったが、個室型ではなく開放型だった。上下に二つのベッドが向き合う形式だ。床には汚物が散らばり、腐った果物の臭いが車内を漂っていた。私とガールフレンドは臭いなんか気にせず、車窓と列車内を何度も眺めていた。韓国を立つ時は真冬で、

インドに到着する時は初秋であつた。彼女は当然の一言を呟いた。「あれが地球というものなのね。」私もやはり当たり前の一言で答えた。「なるほど、そうだ。」彼女は頷いた。昼の車窓ではどの国にもある情のある田舎風景が流れていき、夜の車窓ではやはりどの国にもある暗闇が流れて行く。シーターフルあたりを通過する時だった。列車の床に散らばっている汚物を片付け始めた人がいた。寝ている人や手持ち無沙汰にしている人たちに挟まっておとなしく座っていたのだが、やにわに起き上がったと思つたら、どこから箒と雑巾を持ってきて水をさつと撒き、客車の床を掃除し始めたのだ。中背でほっそりした体格の若い男であつた。この男がその列車の乗務員でないことは、そこにいる誰もが分かつていた。何しろ古びた綿ズボンにだぶだぶのグレーのTシャツを着ているという平凡な服装をしていたのだから。

「あの人、何をしてるの？」彼女はその男の方に顎を向けた。他の乗客もやはりそんな男を変だというように見ていた。しかし男は笑みを浮かべて乗客らに挨拶まで交わし、掃除を続けた。その男が近づいた時、私は彼の顔がインド人とは違うことを知った。

男は私の座席まで来て、足を上げてくれと頼んだ。私としては自然と彼に声をかけるチャンスができたのだが、私の口からやつと出てきた英語というのは次の言葉であつた。

「あなたは、何をしているのですか？」

男は頭を上げて私を見ると、当然なことのように答えた。

「私は、掃除をしています。」



彼の余りにあっさりした答えに、私は再度質問した。

「私が言っているのは、何故あなたが掃除をしているのかということですよ。」

私は「あなたが」にアクセントをおいて言った。すると男は無表情な顔で私を見ながら答えた。

「何故私が掃除をしてはいけないのですか？」

男は「私が」に力を込めて答えた。私はあきれて笑ってしまった。すると彼女が口を挟んだ。

「ここはインドであり、今私たちがいる場所は他でもなく夜行列車の中です。インドの列車は、たいていこのように汚らしくて古臭い車両です。それはインドでは自然なことです。それ自体がインドの一部だと言えますから。あなたは鉄道会社の社員ではなく乗客で、だから掃除する必要はないと私たちは思います。」

ほとんど演説に近い彼女の言葉を聞くと、男は無邪気な表情でにっこり笑った。そして彼の言った言葉はちよつと意外なものだった。

「あなた方と私、友達になりましたよ。」

それが春夫との初めての出会いであった。

その後、春夫は本当に、フレンド'になった。にっこり笑う春夫を見ていて、私たち二人も互いに顔を見合わせてにっこり笑ってしまったのだから。私たちが笑う理由なんか、自分らでも分からないという、そんな表情で。

春夫は自分の荷物をまとめて、私たちの横の席に座った。そしてその晩の列車の中でずっと、長年の友人のように語り合った。初めて出会ったのにごく自然に話したというのはいぶかしく思えるだろうが、春夫はまるで空気のようにいつの間にか私たちに入り込んでいたのである。

その時の感じは次のようだった。旅行者である私とガールフレンドはこちらにいて、周りの風景と人々があちらにいる。こちらとあちらは互いに見合っているが、その間には越えることのないガラスの壁がある。私たちはガラス越しにあちらの方の世界を見物し、あちらの世界は私たちから手数料を受け取る。旅行であれ観光であれ、私たちはあちらの風景の中で生きていけないのだから。しかしあちらとこちらの間には春夫がすっと入り込んで来て、両側の境界を曖昧にする。ガラスの壁がいきなり消えてしまい、外の空気が一気に入り込んでくる。そんな感じである。

明け方にバラシアに到着した私たちは同じゲストハウスで旅装を解いた。私たちは一緒に店外カフェでインドビールを飲み、三輪タクシーがブーンと唸りながら走り回るバザールをうろつき、ガンジス川の川辺のガート（階段）に座ってあれこれと話を交わした。春夫は私たちと一緒にずうっと旅をしてきたみたいに自然に話をし、ガールフレンドと私もやはりそれが自然なように思えた。

それが春夫の持っている不思議な才能であることは、後で気付いた。春夫とビールを飲みながら歓談していると、私は外国語を使っている感じがしなくなるのである。春夫と一緒にバザールをうろつくと、彼女よりも古くから付き合っている友達と歩いているという錯覚に陥ることもあった。このことを彼女に「彼女よりも」という言葉を抜いて言ってみたら、その彼女が私の意見に同意した。

しかし春夫が私たちのそばからいつも離れなかったということはない。春夫には春夫の旅行があるのだから。春夫は私たちの目の前からしょっちゅう消えた。一晩中どこかを歩き回り、朝になって疲れ切った顔で帰ってきたり、どこかから三輪タクシー用の車を借りてきて一人で砂塵の立つ田舎道を走ったりした。インド人の友達だといって出会ったばかりの人たちをゲストハウスに連れて来て一緒に「チャイ(茶)」を飲んだこともあった。その時は円座に座っているインド人の間に日本人が混じってとは思えないくらいに、周囲と馴染んでいた。

春夫は、春夫の周囲に邪魔者なんか全くいないかのように自然に行動した。時には春夫自身ですでに春夫でないように見えることもあった。一度こういうことがあった。ガールフレンドと私は、ゲストハウス近くのバザールの向こう側でインド産アクセサリーを売っている商人をまじまじと見つめていた。あの人、どこかで見覚えがある——と感じたからだ。しばらくしてから呆れて口をぽかんと開けるしかなかった。人でごった返している市場の通りに板を敷いてアクセサリーを売っているのは、他ならぬ春夫だったのだ。インド人の友達から品物を回してもらって売って

いると言う時の春夫が余りにも自然体だったので、私たちは彼がここで生まれ育った人だと錯覚するほどだった。

「あんたは私が知っている日本人とは違う」——と春夫に言ったことがある。そのすると春夫はきよんとして私の顔を見ながら「お前も俺が知っている韓国人とは違う」——と答えた。いつものようににっこり笑って、そんなことは当然ではないかという口ぶりだった。傍にいた彼女が私に向かって「それは偏見が過ぎる」と言ったのは当然なのかも知れない。「日本人らしくなくて、旅行が好きな春夫」これがあれこれ言ってきた末に出てきた春夫評であった。そういえば春夫のことを書いている私のこの文章でもその話でその話から始めているのだから、自分としてはもうそれ以上言うことがない。

それに春夫は、厳密な意味での日本人ではなかった。春夫の祖父はアメリカ人であり、春夫の母は沖縄生まれということだ。「沖縄といえは」と彼女が言った。「台湾の方にある、あの島ですか？琉球と言っていたと思うんですが。」

春夫はうなずいた。彼女はさらに「沖縄人は日本人だと言うことも出来ないし、日本人でないと言うことも出来ないし、そんな曖昧な存在だというけれど。」と言った。その時、春夫が言った冗談はこうだった。

「例えて言えば、春夫の半分以上は他のどこかの春夫、だから半分以上の春夫は別の春夫なの

です。」と。

沖縄で生まれ育った春夫は、東京の伯父の家に寄宿してから様々な不幸に見舞われたという。春夫が東京に出て行くとすぐに沖縄の両親が離婚したのがその最初だった。さらに学校ではイジメに苦しめられた。日本人にはどこか違う容貌の上に口数が少ない春夫としては、教室という宇宙空間に適応できずに学校生活を送った。さらには出願した大学に落ちてしまったのだった。春夫は伯父の家を出て、あてのない旅行に出た。「一種の『自殺旅行』だったんですよ。生きる意欲がなく、死に対して特に拒否反応をしなかったのですから」と春夫は打ち明けた。

春夫は死ぬ前に、それまで貯めていたお金をはたいて旅行することに決め、絶望に陥った青年がよくいく所である北極に行こうと思った。しかし経済事情などの理由で取りあえずは近い韓国を選んだ。釜山から出発し、ソウル、春川、束草を経て国道七号線に沿って下って来て釜山に戻るルートだった。

旅行の初日、春夫は奇妙な感覚が湧き上がったという。釜山の裏通りにあるゲストハウス―おそらくそれはモーテルか旅館だろうと彼女は訂正してやった―に泊まることになった春夫は、これまで経験したことのない長く深い眠りについた。起きてみたら、見慣れない部屋だった。生死の境を何度も行き来するような熟睡の末に目が覚めたという感覚だった。その日の朝、天井を見ながら横になっていた春夫は自分がまるで海の底から這い出てきたような気分で体を起こした。窓を開けて、けたたましい騒音が鳴り響く通りを見下ろした。通りには微かに日が差して無

数の車が行き来しており、そして煤煙の混じった冷たい空気が窓から入り込んできた。春夫は「あつ」と小さい呻き声を發した。それは、どこか分らないが新しく見る世界だったのだ。

朝食を食べようと通りに出たところ、春夫は奇妙な経験をすることになる。道の向こう側から近付いてきた若い女性一人が春夫にこのように尋ねたのだった。

「ひよつとして……神を信じておられますか？」

春夫は女をきよとんと見た。自分が神を信じているかどうかなんて分らないという表情をしたが、その時自分でも意識せずになつこり笑つたのだ。女性も春夫の顔を覗き込んでいたが、彼につられてになつこり笑つた。それだけであつた。どういふわけか、これ以上言葉が必要ないというよふな、そんな気分になつた。

女性をやり過ごしてまた歩いたが、ふと奇妙な感じがした。その女性が言つた言葉が英語ではなかつたことに氣付いたのだ。もちろん日本語でもなかつた。發音からすると「春夫は」今でもその發音をはつきりと思ひ出すことが出来る」と言つた―それは確かに韓国語だつた。「その時に自分が知つてゐる韓国語というのは、キムチとプルコギ（韓国風すき焼き）、それからアンニョンハセヨという挨拶ぐらひだつたのです」と春夫は付け加えた。

その女性と別れ、冷たい風が吹く通りを歩きながら、春夫は不思議なことに死にたいという氣持ちがどこかに消え去つたということを悟つた。それについて春夫は次のように表現した。「例へばそれは、私という存在が違ふ世界の方に五センチぐらひ動いたよふな、そんな瞬間と言へばい

いのかなあ。ひよっとしたら本当に神の存在を知ったのかも知れないし……。神を信じようと思  
じまいと、それが冬の釜山の南浦洞の通りで起きたことだけは、はっきりしているんです」——と  
春夫は真剣な表情で語った。

4

バラナシを離れる前日の晩だった。私たちはゲストハウスの部屋に座って酒を飲んだ。春夫と  
私はインドとガンジス川をどう思うのかについて、対話を交わした。「インドの現在はガンジス川  
の神秘とIT産業の結合だ」——とか、「ジョージ・ヘリソンはガンジスの川辺で死を待ちながら何  
を考えたのか」——のような、ちよつとつまらない話であった。春夫は時々笑うだけであった。

しばらくの間、うとうと寝たようだった。そこが暗闇の底のように感じた。自分の体が深い水  
中に沈んでいる気分だった。深夜の二時か三時頃であった。私は酒を飲んだ時のままの姿でベッ  
ドに寝ていた。

暗闇の中で春夫と彼女が話をしている声がおぼろげに耳に入ってきた。それは水の中でしゃべ  
っているように聞こえた。私は重いまぶたを少し開けた。すると春夫と彼女の目に入ってきた。  
窓から入り込んだ明かりが春夫と彼女を照らし、柔らかいシルエットを作っていた。二人は並ん  
で座り、そつと手を握ったまま話をしていた。その姿はずつと昔からの恋人同士のように自然に

見えた。

これは夜の暗闇のなかで見る水中の風景だった。二人の姿は温かく和やかに見えた。私は二人に自分が目を覚ましている気配を気付かれないように、じっとしていた。

私は魚のようにまた深い眠りについた。

朝起きると、日はかなり高くなっていた。私たちは最後にガンジス川に出かけてみることにした。

何の目的もなく歩き、足が止まった所はバーニングガートだった。バーニングガートは一種の火葬場で、階段の一段ごとに備えている石造祭壇に薪が積み上げられ、その横では布で巻かれた死体が順番を待っている。ある所ではすでに薪に火が付けれ燃え上っていた。

私たちはガートの周辺を歩いた。黒い灰が風に乗ってばらばらと私たち周りを飛んでいる。黒い灰は不規則に飛び舞い、私たちの頭や肩にくっ付いた。彼女と私はこれからデリーに戻って仁川行きの飛行機に乗る予定であった。春夫はバラナシからネパールを経てバングラデシュに下りていくつもりだと言う。そこから日本に帰り、二ヶ月程したら南米を回ってからキューバに寄り北米に向かうという計画だそうだ。日本にいる時は「死んだように」時間を過ごすという話は、その時に聞いた。

バーニングガートの後ろ側では、布で包まれた死体があちらこちらで手押し車の上に載せられ



ていた。その上から雨粒が落ち始めた。布が濡れてきた。私の横の手押し車に載せられていた死体の輪郭が段々とはっきり見えていくのを、私はじっと見つめた。胸と腰の屈曲線や細い脚部の線が、死体を覆う赤い布に少しずつ浮かび上がってきた。若い女性の死体のようだった。私はその輪郭から視線を逸らせることが出来なかった。「今日は寒いわね」―私をちらっと見る彼女が姿勢を正しながら呟く時まで。

冷たい霧が川面の上を立ち込めている。インドの朝だとは信じられないくらいに体感温度は低かった。空気の中に氷の粒が含まれているような感じだった。何人かのインド人が川に体を浸けて瞑想をし、体を洗っていた。

川の向こう側は荒涼の土地だった。家も人もない砂地である。そこを「死の地」と呼ぶ話はゲストハウスの主人がしてくれた。ガートで死体を焼いて残った遺灰はすべてその砂地に流れて行くので、そう付けられた名だという。

彼女と私は階段に座って、段々と強くなる雨に打たれながら川と川向こうを眺めていた。私たちが何かを考えていたということではない。ただ川面に流れる遺灰を眺めていただけである。それとも遺灰の方が私たちを見ていたのかも知れないが。

その時、私たちの目に入ってきた物体があった。それは川に浮かんでおり、よく見ると男の頭だった。男は水の上に頭を出したまま、流されていた。最初は死体なのかと思ったが、ときおり腕を上げて水をかいているので、泳いでいることは間違いないかった。それは明らかに背泳ぎだっ

た。

たまに泳ぐ人を見ることはあるが、雨音まで聞こえるこの寒い朝に背泳ぎとは！　そして私たちの顔が呆れてぼかんとするのに、それほど時間がかからなかった。泳いでいるのはまさに春夫だったのだ。いつの間にか私たちの傍から消えた春夫が、あの水の中にいた。

春夫は頭を川面に出して空を眺めて時々水をかきながら、流れていた。「流れている」と表現するしかない速度だった。おそらく川の向こう側に行くつもりなのかも知れない。春夫の周辺の水面上には、死体を焼いた時に出る白っぽい遺灰や遺骨が散らばって浮いていた。そんな春夫の姿を私たちはガートに座ったまま、ぼうつと眺めていた。

彼女が呟くように言った。

「春夫が……浮かんでいるねえ。」

私もやはり呟くようにして答えるのだが、私の口から飛び出したのは自分でも呆気にとられた言葉だった。

「何と言っても……半分以上の春夫だから。」

彼女が私の方に振り向いた。私の声がどこか愛想もないように聞こえたようだった。

韓国に帰ってから私は春夫のホームページを開き、彼の旅行記ならぬ旅行記を読み始めた。それは、はまったと言っているくらいに熱情のこもった文章だった。

春夫はインドで出会った「フレンド」として、私と彼女を紹介していた。それは無関心でもなく、過剰な愛情でもない文章だった。私たちを描写の対象とするのもなく、主人公としているものでもない。ただ彼女と私が、彼の文章の中で息をしているだけだった。カトマンズを経てチタゴンまで行ったのに、春夫はその途中で見えた荒涼として果てしない風景に感嘆しない。彼は旅行中に会った人たちとどのように過ごしたのかとか、どんな食事をしてどんな考えが思い浮かんだのかとか、そんな細々したことを記録していた。しばらくすると、キューバの音楽を流しながらこれは単なる音楽でしかないと書き、メキシコの通りで目撃した強盗事件をまるで成田空港で起きた事件のように書いていた。しかし奇妙なことに、彼の文章から私が思い出すのは遺灰とともにガンジス川に浮かんでいた春夫の姿だった。

月日が過ぎるのは早いもの。春夫のホームページを訪問する回数が目に見えて減っていった。「時間は流れていくのだからどうしようもない」と思ったが、実際には彼の文章にそれほど興味を持たなくなつたというのが正しい。春夫はそれこそ多くの場所で暮らしてきたのだが、彼の文章が私に与える印象というものが段々と薄れていったのである。

彼の文章を夢中になつて読むことが少なくなつていった。「心や集中力にも誕生と消滅の周期があるのだから」と私は思った。おそらく、そのせいなのであろう。彼女と別れたのも、やはり。

いつの日だったか、彼女が私を呼び出したことがあった。彼女は二段式キャリアを引いて、飛行機から降りた時と同じ姿で私の事務室の前で立っていた。出勤途中のようだった。両手を前に出してキャリアハンドルを掴み、じっと立って私を見つめていた。

そんな彼女に向かって一歩一歩近づいていったのだが、何か私の胸中を通り過ぎるのを感じた。一瞬吹き抜けた風かも知れないし、老木が最期に落とす葉っぱかも知れない。その時、これで彼女との関係が過去のものになったと私は実感した。それは彼女も同じだったようだ。その日の夕食を共にしながら互いに目が合った時、私たちは同時にぎこちなく笑った。私たち二人の間にいる墮落の天使が、私たちの顔に重い石を一つずつ載せていくのであった。その石が落ちたらちよつと笑い、そうすると意地悪な天使が重い石をまた載せるのだ。私は春夫のあのにつこり笑う表情を真似しようとしたが、無理であった。

私は考えた。「何というか……。これはただ日常的によくある事件なのだ。だから今すぐには何の影響もないだろうし、どうってことはない。俺は彼女と別れて家に帰って寝て、明日は出勤し、そして何事もなかったように過ごす。」私はそんなどうでもいいことを考えながら、彼女と向き合ってた座っていた。まるでキリンとペンギンが一緒に座っているみたいに。互いに言葉を交わすこともなく。

次の日の夜、彼女は電話をかけてきた。そして今度付き合い始めたアメリカ人の恋人について話を始めた。それはまるで初めて習った楽器とか、やっと上達した外国語のことを話すのとよく

似た調子であった。同じ航空会社に勤めていて、何か何やら分からないうちに、自然と恋人同士になったと言う。それが私と別れた原因なのかも知れないし、別れたために起きた結果なのかも知れないが、彼女は笑いながらしゃべった。私は受話器を耳に当てたまま、彼女の言うことにならずいた。

人生はある瞬間に突然流れ始めるようだ。その頃、私は同じ会社に勤務していた女性研修社員と親しくなり、誰にでも見せつけるぐらいの恋愛関係にまで発展していった。故郷で一人暮らしをしていた父親を招いて、戦争が起きたような忙しきで結婚式を挙げたのは、それからちよつと経ってからだった。衝動的に旅立つ旅行のように、全てのもがさあつと流れていく、そんな感じだった。しかし結婚後の生活は順調ではなかった。私はしよつちゆう外を出歩き、妻はそんな私に我慢できなかった。半分以上の私は自分の家ではなく、どこか他の所で生きているような感じであった。それはやはり、おそらく妻も同じだったのだ。

海外赴任を希望していたのだが、私は国内代理店の管理の仕事から離れられなかった。それもそのはずで、アメリカに本部を置く親会社が経営不振のために、韓国支社も人員削減など事業全般の見直しが始まった時だったからだ。全てのことか思いのままにならないことを悟ったが、実はその「思い」というのが具体的に何かということか自分でも分からなかった。原因と結果がごちゃ混ぜになった感じだった。妻とは一年もしないで協議離婚した。不幸は不幸を呼ぶものなのか、離婚手続きをしている最中に父が亡くなった。

父は生まれ育った田舎の家で息を引き取ったが、私はそれが父の小さくて地味な幸福だと思った。父は一生の間、一度も離れることのなかった自分の空間で静かに亡くなったのだ。だいぶ前に一緒に中国旅行に行った村のお年寄りたちは、今はほとんど残っていない。半分以上はこの世を去ったのであるが、一部は村の近くで行われたリゾート開発のせいでの地から去った。開発予定地のあたりに土地を持っていた何人かの人たちが「大儲け」をして都会に引越したのだ。反面、父を含めてそっちの方に土地を持っていない多くの村人はリゾート建設反対デモを行なつて、開発側と対立した。以後、リゾート開発の会社と市役所に何回かデモをしたが、結局はうやむやになった。時間は多くのものを一瞬にして変えてしまう。故郷は故郷であるが、自分としては何の未練も残っていない故郷だった。

三日にわたる葬儀は簡素だった。近所で暮らす何人かの知人たちがやって来てくれ、また私の職場の何人かが訪ねて来て一緒に酒を飲み、私設公園墓地を購入して父を埋葬してやり、一連の葬儀がすべて終わってから父の遺品を整理し、死亡届を出し……。

村の不動産屋に家とわずかの畑などを売りに出したのだが、父の友人でもあるその不動産屋の主人が生前の父を回顧した。「健康そのものだったヤンバン(両班—ご主人)が急に倒れて、しばらくしたらまた目を覚ますという騒ぎがあったので、余計に痛ましかった」と言う。「おい、ここはどこか？俺が生まれた村なのか？俺が生まれた村はどこに行ったのか？」—目が覚めた時の父の言葉を聞かせてくれた不動産屋の主人は空を見上げ、可哀想だと言わんばかりに溜め息をついた。

「それでもヤンバンは故郷でお亡くなりになったから、まあ良かったと言えますねえ。」

私は丁寧に挨拶して不動産屋を出た。父の古くからの友人であるこの人と会うことは、おそらくこれで最後なのだ。家と畑が売れば、電話かファクスで処理するだけで終わるのだから。

私は父の部屋から布団を出して引き、体を横たえて故郷の最後の晩を過ごした。古びた壁紙がそのまま残っている天井を見上げながら、菖蒲の花模様を一つ一つ数えた。五十ぐらいの菖蒲を数えたところで数字を忘れると、また一から数え始めた。二百ぐらいの菖蒲を数えたところで数字を忘れると、また一から数え始めた。五百ぐらいの菖蒲を数えたところで数字を忘れると、また一から数え始めた。

彼女とはしばしば連絡を取り合った。妻ではなくスチュワーズの彼女のことである。一度は久しぶりの夕食をしたこともあった。こともあるように、その日は私たちが初めてデートした記念日だった。大声が飛び交う飲み屋で、話をするのが生まれて初めてというぐらいの新鮮な気持ちで彼女と対話したのは、何年も前のこの日のこと。

「こともあろうに」：：と言ったが、ひよつとして私たちはその日を覚えていて、偶然を口実にして再会したのかも知れない。「もう二度と会うこともないと言っておきながら、昔の記念日はねえ。私たちは本当に偏屈な性格してるねえ。」どちらが先に言ったのかは関係なく、そんな言い方をしては一緒に笑った。サラダのキーウイドレッシングがちよつと酸っぱかったのか、彼女

は顔をしかめた。私が冗談めかして尋ねた。

「空の上はどう？ いい所なの？」

彼女は意外にも、力のない声でテーブルを見下ろしながら呟いた。

「空の上は……寂しい所なのよ。窓の外を見ても信号もなく、飛んでいる雲に手を出して振ることも出来ないし。」

一人呟くように、彼女は言葉を続けた。

「空の上にいるのは人だけでしょう。私が世話している人たち。」

私はちよつと意地悪な質問をした。

「飛行機の場合は時速九百kmだね。宣銅烈(プロ野球の投手)が投げるボールよりも六倍も速く動く機械の中で、ジュースや飲み水や食事をサービスする。まさか、それを知らなくてスチュワーデスの仕事を始めたというの？」

彼女の顔から元気のない笑いが出てきたと思つたら、すぐに消えた。そして彼女が春夫の話を言い出したのだった。

「春夫を見たの。」

「春夫？ 春夫？ あ、あの春夫。」

私は彼女の口から春夫という名前が出るや、軽い感嘆の声を上げた。水草や緑藻、ゴミでいっぱい記憶の泥沼の中からずっと水面に浮かび上がってきた名前と言えいいのか。インド旅行



をしてからかなり時間が経っており、その間の生活の変化が激しかったからなのだろうか、今は「オールド フレンド」という感じがした。

彼女の話はちよつと意外なものだった。彼女が春夫を見たのはデトロイト空港であった。「いや、その人が本当に春夫なのか、そうでないのか、確かじゃないんだけど」——と言葉を濁しながら話を続けた。

彼女は乗務員専用ラインで順番を待っていた。両手を前に出して例の二段キャリーを持ち、制服を着ていた。その時に横側の外国人入国者たちが手続きをするウェイティング ラインの方でちよつとした騒動が起きた。

ある男が空港警備隊所属の職員と喧嘩を始めたのであった。男は大声を張り上げて抗議し、職員二人が男の両腕を捕まえて別室への同行を要求した。使い古したジーンズにだぶだぶの褐色ニットを着た東洋系の男であった。声とイントネーションからして日本人のようだったが、「日本人らしくなく」猛烈に抗議していたというのだ。

「あれは春夫だ」——と思ったのは、喧嘩をしていた男がふいに彼女の方に振り向いた時だった。目が合った瞬間、につこりと笑う男の顔が自分の目をかすめたように見えたのだが、それはおそらく自分の錯覚だろうと彼女は言った。

アメリカの空港では全身スキャンが「ランダム」に行なわれていると彼女は説明した。任意に選択した外国人乗客を大きな円筒形の撮影台に入れて、容疑者のように両腕を上を挙げさせた後

にエックス線で全身をスキャンするといふのだ。9・11テロ以降に強化された措置だといふ。要求を拒否すると、入国許可が下りないこともある。

彼女は春夫を助けることが出来なかったといふ。どつと集まって来る空港警備隊員たちが彼を別室に連れて行ったからであつた。単純な抗議のレベルを越え、一種の暴行を働いたことになるので、おそらく簡単な身上調査の後、入国拒否手続きが進められたらうと彼女は言つた。

私は、記念日といふのはこんな侘しいものなのかと思つた。レストランの窓には雪が降つていふた。冬も終わりなので、ふんわりした雪ではなかつた。「湿つた雪、水分のたつぷり含んだ雪……私は呟いた。

彼女は自分のこれからの計画についてしゃべつた。近いうちに航空会社に勤めるキャプテンと結婚する予定で、ロスアンゼルスに住むつもりだといふ話だつた。スチュワードの仕事は辞めて、韓国とはこれでお別れだと付け加えた。「長くて終わりのない旅をすることになつたわけね」と彼女は言つた。「それでも時々遊びに来るわ。」わざわざ言うことでもない一言であつたが、私はうなずいた。

店を出て別れる間に、彼女はまた春夫の話をした。

「あの時、バラナシのゲストハウスで春夫と一晚中話をしたでしょう。」  
彼女は湿つた雪が降る空に視線を向けて言つた。

「あんたも私たちを見ていたのだから、覚えていられるでしょう。あの時、私たちがどんな話をし

ていたか、知ってる？」

私も雪粒が大きくなっていく空を見上げた。

「私は春夫が美しいと言ったのよ。」

大雪になっていく空を見上げたまま、彼女が言葉を続けた。

「その時も春夫はにっこり笑ったんだけど、その笑いの中にもものすごく寂しげな表情が見えたのよねえ。」

その寂しい表情を見て、彼女は黙っているしかなかったという。バラナシの夜が更けていった。その暗い部屋の中の静けさの中で、春夫がこう言ったという。

「美しいものは、春夫以外の全てだ。」

それは春夫の言葉だったのだが、どこか乾燥したその言葉が非常に希薄な空気のように感じられて、もう何も言えなかったというのだ。そしてその瞬間、彼女にはある感覚が込み上げたという。

彼女が湿った雪を手のひらに受けながら、静かに言った。

「ちっちゃな愛が一つ行ってしまったという感覚……」と。

春夫については、さらにもう一つしなければならぬ話がある。

私が勤めている韓国支社は危機を克服し、回復の兆しを見せていた。私はその危機の間無力感

を感じていたのだが、会社は政治の世界に顔が広い新任会長の強靱なリーダーシップによって活動範囲を広げていった。韓国支社が東アジアおよび東南アジア市場を総括するようになり、社内は静かな興奮が巻き起こった。

私は海外営業強化のために始まったプロジェクトに参加することとなり、外国人社員の新規採用を推進する仕事を任された。多様なアジア系外国人を選抜する作業だった。

意外にも私は志願者の中に春夫に似た日本人を見つけた。オンラインで受け取った志願書類には高橋春夫ではなく原恭介と書かれていた。しかし写真を見ると、それはまさに高橋春夫の目つきと鼻筋と唇であった。全体的な印象は志願書類の方がはるかに鋭敏そうであったが、「やはり春夫だ」という思いは振り払うことが出来なかった。私は半信半疑であったが、確認する手立ちはなかった。春夫のホームページがいきなり閉鎖されてから、彼の近況はもちろん彼の文章も接することが出来なかったためである。

面接の時、私は原恭介に直接対面することができた。原恭介はストライプのスーツをぱりっと着こなし、口元に控えめな微笑を浮かべる男であった。日本人らしく礼儀と節度を持っている感じがした。日本の小規模貿易会社の実習生として勤務したことがあり、最近韓国の女性と付き合いようようになってから、韓国の文化に深い関心を持つようになったという。

「原氏はひょっとして他のところで高橋春夫という名前を使っていますか？」

私はそのように尋ねた。原恭介は私を見て、何を言っているのかという表情をしながら首を傾

げ、はつきりと答えた。「自分の名前は原恭介であり、高橋春夫という名前は知らない」と言うのであった。

面接が終わったその日の晩、私は一人家で酒を飲んで、原恭介の番号を探して電話をかけた。原恭介は人事担当者が夜遅く電話をかけてきたのは、ちよつと変だと思ったようだった。十時を過ぎていたので、当然の反応だ。しかし私はそんなことにお構いなしに質問した。

「原さん、あなたは本当に高橋春夫ではないのですか？あなたはかなり以前に旅行について、いや人生を語るブログを運営したことがあって、インドで私と会ったことがあるでしょう。」

原氏は何を言っているのか訳が分からずに沈黙していたが、やがて口を開いた。

「そうです。私は昔インドに旅行したことがあり、ブログを運営したことがあります。しかしそれは、旅行や人生のことではなく、グローバルトレンドの事です。もちろんグローバルトレンドはやはり人生のことではありますが：：ともかく、私の名前は原恭介であり、高橋春夫という人は知らないのです。」

私は原氏の言葉が終わるや、すぐさま熱を込めて断固として言った。

「そうですか。あなたは、やはり高橋春夫ではありません。あなたは高橋春夫であってはいけないのです。高橋春夫は今でも：：。」

電話の向こうで、原氏は沈黙を守った。

「…：旅行中なのですから。」

そのように言ってから、私は一方的に電話を切った。アルコール度の高い中国のマオタイ酒が入ったコップを手に持って、口に流し込んだ。

しばらくして私は会社を辞めた。

理由はいくつかあった。プロジェクトが遅々として進まなかったこと、それには私とチームメンバーの責任もあるということ、会社側からの締め付けが少しずつ強くなってチーム内の葛藤が深刻になったこと、等々である。

私は特に将来の計画も考えずに、辞表を出した。別の会社に転職することも出来るし、あるいは独り身だから全く違う仕事を始めることも出来るのだ。しかし私の気持ちはどちらにも行かなかった。

何日間、ベッドで横になって天井のアラベスク模様を眺めて、時間をつぶした。アラベスクの一つ一つを三百個ぐらいいまで数えて数字が分からなくなると、また一から数え直した。七百個ぐらいいまで数えて数字が分からなくなると、また一から数え直した。九百個ぐらいいまで数えて数字が分からなくなると、また一から数え直した。千五百個ぐらいいまで数えた時、私はふとパソコンの前に座ってインターネットをつなぎ、インド行きの飛行機チケットを買い求めた。

旅行でも行こうというのでもなく、悟りを開こうというのでもなかった。どう言えはいいの

であろうか。ともかくそれをしなければならぬということだ。それは私がニューデリーに行つて、バラシナ行きの夜行列車に乗ることだった。寝込んでいたり手持無沙汰にしている人たちの間に初めはおとなしく座っていて、急に立ち上がつて掃除を始めるのだ。そうしたら、誰かがこのように声をかけてくるかも知れない。

「あなたはひよつとして高橋春夫をご存知ですか？」  
と。

私にはつこり笑つて、このように答えるのだ。

「半分以上の春夫でしたら、

おそらく。」